

---

# White x White

黒星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

White x White

### 【Nコード】

N8071Q

### 【作者名】

黒星

### 【あらすじ】

新年を間近に控えた十二月三十日。一人で途方に暮れる純白のシスターと、真っ白な最強の少年が再会することから始まる物語。

## Prologue (前書き)

原作の出来事がいくつかなかったことになったパラレルワールドとして読んでください。

## Prologue

年末年始を中間に挟んだ二週間。その二週間は、学園都市の内側と外側の出入りに関する規制が若干緩む特別な十四日間だった。

具体的には、『年の瀬や元旦くらい、家族と共に過ごすがいい』という、聞く人が聞けば耳を疑うような学園都市統括理事長のお心遣いなのである。

毎年クリスマスの翌日辺りからちらほらと学生達が学園都市を後にしはじめ、元旦の三日前に到った辺りから大渋滞が発生するレベルでの帰省ラッシュが始まる。

「……………暇なんだよ」

が、帰省すべき家もないインデックスには、まったくもって関係のない話だった。

十二月三十日である本日、彼女は居候先である上条当麻の部屋にて無気力に寝転んでいる。

家主は、いない。正午を過ぎた辺りに一人で帰省していった。

ここで一応補足しておく、彼はインデックスを放っていった訳ではない。家を出る際に「一緒に来るか？」と誘っていたのだから、ただインデックスがその誘いを断ったから、だから一人で帰省したのである。

インデックスは、夏の旅行の時も家族水入らずで過ごせるチャンスに割り込んでしまったし、今回は遠慮すると、そう言って断った。それくらいの気遣いはいくらなんでも出来る。

ただまあ、後悔がないと言えば嘘になるのだが。

「……………お腹すいた」

か細い声が虚しく響く。そう、後悔とはまさにそのことだった。彼女は、炊事洗濯その他諸々の家事スキルが決定的なまでに欠如している。この前など、ただ風呂を掃除しただけで給湯器を壊してしまった。

だから当然料理も出来ない。未知の機械が満載のキッチンなど、立つただけで目が回りそうになっている。

冷蔵庫には最低限（ただし、貧乏学生基準）の食料が詰め込まれているものの、流石に生肉や生野菜をそのまま食すような真似はしたくない。

というか、たとえそんな真似をしたとしても、残り一週間以上をこの程度で生き抜けるはずがない。

……………要するに、大食いの彼女にとっての未曾有の危機が訪れているのだった。

「……………スフィンクス、どうしよっか？」

頭元で同じく寝転んでいる飼い猫に問いかける。返事は「ミー」。何を言っているのかまったくもって理解できない。

まあ秀囲氣的には、『なんでもいいから早く飯食わせる』といったところだろうっか。

「うんうんスフィンクス、私も同じ気持ちなんだよ」

そう判断して、捕まえて、持ち上げる。視線が重なって何となく笑いかける。反応はやはり「ミー」だ。

そのまま飼い猫をじーっと見詰め続ける。見詰め続けて、やがて“別の何か”に見えてくる。それを敏感に察知したのか、「ふしゃあっ！！」と力一杯振りほどかれて逃げられた。

「うーん、流石にこれはマズイかも」

改めて思う。

お金はあるものの、正直使い方が分からない。  
本格的に、どうしよう。

「ん？」

その時、インデックスの視界に一枚の写真が映った。  
三ヶ月ちよつと前に行われた、“大覇星祭”という大運動会の最  
終日に撮ったらしい、クラス写真だ。

中心で家主とお隣りさんと青髪の大男が馬鹿やって、委員長つぽ  
い女子に制裁を加えられているといった、彼らのクラスではいつも  
通りな日常を切り取ったような、そんな感じの写真だ。

その最も手前で、涙目になってその日常を眺める見た目幼女の先  
生がいる。

月詠小萌。インデックスも上条も信頼をおいている、“大人”。

「 そうだ、こもえがいたっ！！ 」

ガバツと一気に立ち上がるインデックス。スフィックスが警戒し  
て「ふしー！」と唸る。無視して彼女は仕度をする。

こもえならきつと助けてくれる！ そういえばとうまもお世  
話になっておきなさいみたいなこと言ってたし……。

大きめの鞆に下着やら衣服やら最低限必要なものを詰める。あり  
とあらゆるものを記憶している脳内から、この学生寮から月詠宅ま  
でのルートを引っ張り出す。

仕度を終えて玄関先まで行ったところで、

「スフィンクスー、置いてくよー？」

飼い猫を呼んだ。依然として警戒している様子だったが、“このまま置いていかれた先に待つ結末”を本能的に悟ったらしく、大慌てでインデックスの胸に飛び込む。空いている方の腕で優しく抱き抱えた。

部屋を出て、この前習った通り鍵をかける。ぬかりはない。思わず鞆を持った方の腕を高く上げた。

「じゃ、こもえの家に行くよー」

……が、インデックスは小萌の家を目前にして歩みを止めた。理由は簡単。この距離からでも分かるくらいに慌ただしそうだったからだ。

「はわー！？」という特有の悲鳴が上がったり、ガシャーン！という破壊音が聞こえたり、小萌の部屋の前に突然ゴミ袋が現れたり、明らかに大掃除の真っ最中だった。

あわきも大変だなー、と最近知り合った月詠宅の同居人を憐れみつつ、インデックスは踵を返す。今日中に終わる可能性は皆無だ。

「うーん、それはそれで困るんだよ……」

振り出しに戻り、途方に暮れる。他にも知り合いはいるのだが、

所在が分からない。というかそもそも、帰省して既にいないかもしれない。

「……………どうしよう」

いまさらながらに泣きそうになってくる。こんなことなら、遠慮などせずに上条に着いていけばよかったかもしれない。自身の無計画さが嫌になる。

「うう〜」

そんな、本格的に泣きの体勢に移行しようとした矢先。

手前の角から現れた人物とぶつかった。

「あつっ」

「あん？ うオツ!？」

インデックスは軽くよろけて、相手も軽く、いやかなりよろける。よく見ると、相手は杖について歩いているようだった。脚が悪いか怪我をしているようだ。

慌てて相手を支える。体重は妙に軽く、大して腕力のないインデックスでも余裕で支えきれた。

どうしよう、今のは明らかに私が悪いんだよ。

その状態で思案する。普段ならば文句を口にしていたかも知れな



いが、相手が相手だ、そういう訳にもいかない。  
だからまあ、ここは素直に謝罪するのが吉だ。

「……えっと、あの、ごめんなさ　　あ」

謝罪しようとして、思わず止まる。非常に近い位置にあるその顔が、彼女が記憶している人物と見事に合致する。

「……ってエな。おいテメエ、人にぶつかつといて謝りもあア？」

相手の方も気付いたようで、不平を中断して声を上げた。

インデックスは完全記憶能力の持ち主だ。

見たもの聴いたものその全てを正確に明瞭に記憶して死ぬまで忘れない。だからここにいたるまでの全てを、彼女は覚えている。

ちょうど三ヶ月前の話だ。

同居人を捜して慣れない学園都市を徘徊し、途方に暮れ、空腹で倒れそうになる中、さきほどと同じようにぶつかつた人物。

無償でハンバーガーを大量に奢ってくれた上、同居人捜しを手伝ってくれた人物。

何やら大変な事態に巻き込まれて大変な目に遭って、それでも自分や茶髪の少女を護りつつ闘っていた人物。

「あの時の人だー」

「あんな時のガキかア？」

とにかく白い。白くて、でも二点だけ真っ赤な少年と。純白のシスターである自分と似たような感じの少年と。

インデックスは、再会した。

あなたの家にお邪魔したいな（前書き）

一応カテゴリがコメディなので、バトルはほとんどないと思ってください

あなたの家にお邪魔したいな

インデックスが初めて姫神秋沙と出会った某ハンバーガーショップにて。

当時の姫神をも遥かに凌駕する量のハンバーガーをテーブルに積み上げて、インデックスは満面の笑みを浮かべていた。ついに食事でありつけるから。

「……………なんつーか、すげエデジャヴユだわ、これ」

テーブルの向こう側。店員五人がかりで運ばれてきたハンバーガーの山に遮られて視認できない対面の席から、そんな気怠げな呟きが聴こえてくる。

声の主は、あの白い少年だ。

「うー、毎度毎度ありがとうなんだよ。まだ事情も話してないのにこんなにたくさん奢ってくれて」

「……………どオいたしまして」

弾むインデックスの声に反して沈みがちの白い少年の声。あちらからすれば、厄介な奴に遭遇したといったところだろうから、当然と言えば当然だろう。何か非常に申し訳ない。

だからせめて、

「……………」

「……………？ どオした、食わねエのか？」

「うん、あなたの合図があるまで食べない」

好き勝手に食べないようした。一瞬、自分のその行動と普段の飼い猫の行動が被ったような気がしたが、考えないようにする。

なんだそりゃア？ という訝しげな声が聴こえた。見えないが、呆れた表情が引いた表情をしているに違いない。まあ当然の反応だ。

「~~~~~」

待つ。鼻唄混じりに待ち続ける。インデックスは舞い上がりすぎて気付いていないが、白い少年にとってはこの上なく無駄な時間だ。やがて、

「……………さつさと食べ」

「うん！ いただきます！」

ぶつきらぼうな口調で許可が下りる。それを皮切りに、聖職者としては完全に失格な暴食が開始された。

わりと大きめなハンバーガーが続々と小柄な身体の中に消えていく様を、店内の人間全員が見世物でも見るかのような好奇の眼差しで眺めている。

そんな中で唯一、僅か数分で山の半分ほどを食らい終えた彼女を呆れ返った様子で眺めていた白い少年が、果てしなく面倒くさそうに席を立った。

「ほうひはほ？」

何個目になるか分からないハンバーガーを口一杯に頬張った状態

で訊ねるインデックス。白い少年は、真っ白な髪に隠れた頭をポリポリと掻きつつ、非常に気怠そうに一言告げる。

「帰る」

「!？」

「!」

それを聞いてインデックスは慌てる。さっさと踵を返し、「金は返さなくていいぜ。馬鹿みてエに有り余ってつからなア」とか呟いて去っていく彼を、どうにか引き止めようとする。

「ふひんふふ!!」

そこで、飼い猫に活躍してもらうことにした。足元でおこぼれでも期待していたのか、“待て”の体勢で静止していたスフィンクスの名を呼び、ついで白い少年を指差す。インデックスの言わんとしていることを理解したのか、不満げではあるものの駆け出して、白い少年に飛び乗った。

「あん？」

と怪訝そうな声上がる。しかし、直後にその声は。

「　　　　　つてエツ!？」

短めの悲鳴に変わった。スフィンクスが、飼い主直伝の噛み付きを行ったからだ。

「ちよつ、待てっ!!　　痛い痛い痛い!!　　やめろオ、俺アあんまし皮膚強くなエンだよッ!!」

左腕に噛み付く猫を振り払おうともがく白い少年。が、当然相手も振り払われまいともがくため、噛む力が増して逆効果だ。右手で引つ張り剥がそうにも、そちらは身体を支えるのに尽力している。

「くそっ何がしてエンだデメエは！？ おいこらチビシスター、コイツどオにかしやがれ！！」

「チビシスターじゃないよ！！」

怒声を怒声で返す。この短時間で残りのハンバーガーを食い尽くしたインデックスは、トテトテと白い少年に詰め寄り、（一応スフィンクスを引き剥がしてから）続ける。

「まずはごちそうさまでした。……それよりチビシスターって何？ 私一度名乗ってるはずなんだよ？」

「ああ。でもよオ、こっちの方が分かりやすくいいだろオが」

「そうかもしれないけど、それにしてもチビはないよ！ ていうか、そういう問題でもないかも！」

ひたすら失礼なあだ名で呼ばれて怒り心頭なインデックス。身長が低いことは何気に気にしていたため、感謝の気持ちか吹っ飛ぶ勢いだ。

白い少年はつまらなそうに。

「……………俺なりの冗談のつもりだったんだがなア。何がカンに障ったんだ？」

「全部……！ その…… チビ呼ばわりした全てに対して……！」

「面倒くせエガキだなア、オマエ」

怒りを事もなげに受け流すその態度に、より一層怒りが蓄積されていく。「むーっ！」と駄々っ子のようにじだんだを踏むインデックスに、白い少年は呆れて溜め息をついた。

溜め息をついて、言った。

「悪かったなインデックス。……これでいいのか？」

「ッ。……そんなにあっさりと言われると張り合いがないし、怒ってた私が馬鹿みたいなんだよ」

「……ホント面倒くせエガキだなア、オマエはよオ」

スフィンクスに噛み付かれた箇所をさすりつつ、白い少年はこの上なく呆れた表情を作る。怒りも徐々に治まってきたインデックスは、再び立ち去ろうとする彼の真正面に立ち塞がる。

「……まだなつか用か？」

「うん、ちょっとね」

「それは、俺にメリットがあるものか？」

「大いに」

今日一番の怪訝な顔をする彼に対し自信ありげに「ふふん」と胸を張るインデックス。その拍子に落下した飼い猫が軽く悲鳴を上げ



つつ受け身をとる。

たっぷり十秒、白い少年の返事を待っていたインデックスに、

「……聞いてやる、場所を変えるぞ」

白い少年はそう言って、一連の騒ぎを迷惑そうに眺めていた客に溢れる店内を共に後にした。

「あなたの家にお邪魔したいな」

インデックスは開口一番そう言った。

ベンチに座り込んでいた白い少年は、それを聞いた途端に似つかわしくない啞然とした表情を作る。

やがて、

「おいこらオマエ、その発言が意味することをもオ一度よく考えてみやがれ」

馬鹿を見るような馬鹿にした眼でそう呟いた。

が、インデックスは「何を訳の分からないことを言ってるの?」  
とでも言いたげに呆れたように告げた。

「意味も何も、まさに言葉そのままなんだよ。私はあなたの家にお邪魔したいの」

「そオじゃなくて……いや、もういい。訊いた俺が馬鹿だった」

何かを諦めたように白い少年がうなだれる。インデックスとしてはその言動の意味の方が理解出来ないのだが、とりあえず気にせず続ける。

「ほら、この前もさつきも無償で奢ってくれたでしょ。だからお礼をしようと思っただよ」

「んなモンいらねエよ」

「って言うよね、分かってたんだよ。でもね、とうまもこもえも、良くしてもらったんなら必ずお礼はするべきだって言ってたし、私もそう思っただ。だからここは引かない」

瞳に強い光を灯らせつつ宣言する。「だからそんなのいらねエっの……」と呆れ気味にその瞳を見つめ続けた白い少年は、やはり呆れ気味に溜め息をつく。

「……いいぜ、とりあえずその礼とやらを受けてやる」

「！じゃあ」

「ただ、それと俺ン家に来ていいかどうかは別問題だ」

「ええー、何でー？」

「そもそも繋がりが見えねエンだよそれとこれに。なんで“礼する”俺ン家に邪魔する”になんのかーから十まできちんと説明してみやがれ」

折れたと思った直後に実は折れきれていなかったことを悟り愕然

とするインデックス。説明を求められているが、中途半端な内容なら一も二もなく却下されるだろう。そうなれば、お礼についてもやむやになる可能性が非常に高い。

ここは外せない、と全神経を総動員する勢いで脳内にて彼を納得させられる説明文の作成を試みる。

動機はよし。矛盾点はないはず。よし、行ける！！

彼女の内に自信が漲る。これならば、このいつそ失礼なほどに退屈そうな少年を納得させられるだろう、と。

「ふふん、聞かせてあげるんだよ」

「おオ」

「却下だ」

一蹴された。

あなたはご飯奢ってくれたから代わりに私はあなたにご飯を作つてあげる、と言ったら即却下された。

「な、何でー!?!」

「なんでも何も、……………天の声が告げてんだよ。オマエにそんなことやらせたら地獄を見ることになるってなア」

「私にはそんな声は聴こえないんだよ！！ うー！」

さきほどと同様に駄々っ子のようにじだんだを踏むインデックス。白い少年の方は凄まじいドヤ顔でその様子を眺めている。

「うー訳で、俺ン家来ンのはナシだ。残念だったなアチビシスター」

ニヤニヤとイタズラっぽく、端から見れば狩人のように微笑みつつ白い少年は言った。インデックスはよほどショックだったのか、“チビシスター” 呼ばわりされたにも拘わらず「うーうー」唸るのみ。勝ち誇ったように、彼は続ける。

「じゃアあれだ。礼についてはまた別の機会に別の手段で

」！

しかし、ふとその口が止まった。

視線はインデックスに固定されて離れない。

それもそのはず。

「うー！」

インデックスの碧眼に涙が浮かんでいたのだ。屈辱ゆえなのかお礼を出来ないことについてなのかは不明だが、とにかく彼女は泣く寸前なのだ。

それに、白い少年は。

「チツ、しゃアねエな、来いよ」

「……………え？」

そう告げた。却下されたにも拘わらず許可の言葉が出たことに困惑するインデックスは首を傾げる。

「来いつつたんだよ。なんなんですかオマエは？ 散々行きたい行きたい言つといて、いざ許可したらそれですかア？」

「……………え、でもさっきナシだって」

「俺そんなこと言つたっけか？」

……………もう一度言うが、インデックスは完全記憶能力の保持者だ。見たもの聴いたものを全て記憶し続ける、そういった人間だ。だからさきほどの彼の言動も明瞭に記憶している。

つまり彼がとぼけていることくらい余裕で看破している。

「……………本当にいいんだよね」

「あア」

だから、とぼけている理由が彼の優しさだとすぐさま理解できるのだ。

「……………えへへ、ありがとうね」

「おオ」

白い少年がゆっくりと立ち上がり、インデックスに背を向けて歩き始める。ついて来い、と言われていているような気がした。

スフィックスを抱き抱えて彼の後ろにつく。そこでふと気付き、訊ねる。

「ねえ、私まだあなたの名前知らない」

「あん？ ……別にどオでもいいだろんなモン」

「よくないよ。私が呼ぶ時に困るし、……それに、さっきまでみたいに“あなた”って呼んでたら妙な勘違いをする人が出てくるかもしれないし」

「……なんでそっちの懸念が出来てあっちの懸念が出来ねエンだよオマエは」

「え？」

「なんでもねエ」

白い少年がもう何度目になるか分からない溜め息をつく。そして観念したかのように、頭だけで振り返って名乗る。

「………一方通行だ」

「あくせられーた？ それがあなたの名前なの？」

頷く一方通行。確認して頭の中で反芻していたインデックスは突如吹き出した。

「……おい、何笑っていやがる？」

「え？ だって凄く変な名前なんだもん。私知ってるよ、先週の力ナミンでやってた。“あくせられーた”って、“かそくそーち”の

ことだよ。人の名前じゃないよー」

インデックスはくすくすと笑い続ける。だから一方通行も。

「……オマエにだけはぜってえ言われたかねエな。“目次”のくせしてよオ」

「な!?!」

名前について弄り返してやった。

目次って、なんてこと言うの！ 私のこの名前はねー！ というシスターの怒声を響かせながら、二人は一方通行の家へと向かっていく。

これが噂のハーレムなんだね

「外装も相当だったけど、中はまた一段と豪華なんだよ」

一方通行の家を訪れたインデックスはまず最初にそう言った。あえて口にはしなかったが、上条当麻の家とは雲泥の差だった。まず玄関。

あちらは中途半端に狭くて二人揃って靴を履くことすら出来なかったが、こちらは二人で座り込んでもまだ余裕がある。次にリビング。

あちらは一人寝転がるだけで凄まじく狭苦しく感じたのに、こちらには三人くらいで寝転がったとしてもまだまだ余裕があるほどに広いソファーまで設置してあった。テレビも大きい。

次にキッチン。

もう比較するのが失礼なほどに圧倒的な面積の差がある。

それにこの家、いくつも部屋がある。見た感じ同世代の上条と一方通行に何故これほどの差があるのだろうか。

気にはなつたものの、眼前のソファーの魅力に負けてそんな疑問は吹っ飛んだ。

飛び込む。凄まじい弾力により何度も小刻みに跳ねる。上条家のベッドでも味わえない感覚に完全に魅了されて脱力してしまった。

途端に、一方通行の手刀が脳天を襲った。

「あいたっ!?!」

物理的な衝撃により感覚が現実に取り戻される。見ると、人間一人分ほどの隙間を空けて、呆れ返った様子で一方通行が座り込んでいる。



「オマエは一体どおいう名目でここに来たんだっけか？」

「……はっ！ そうだったんだよ！ あまりの気持ち良さに意識が飛びかけてたかも」

「……天然なのか？ わざとなのか？」

「？」

眉間に皺を寄せて溜め息をつく一方通行に首を傾げるインデックス。相変わらず言動が理解出来ないな、とこちらもこちらで溜め息をつき、壁に取り付けられた時計を確認する。

「でも、まだ三時を過ぎたくらいなんだよ？ 流石に早すぎるかも」

「オマエは馬鹿か？ 勝手の違う他人ン家のキッチンで、いきなりなんの予備知識もなく料理出来るのか」

「……出来ない」

「だろオ？ だからよオ、時間まで調理器具の配置の把握、調味料の種類の把握、食材の確認その他諸々済ましとけてんだよ」

「なるほど！ 了解なんだよ！」

小走りでキッチンへ向かう。その間に同居人の調理光景を思い出す。とりあえず、彼に出来て自分に出来ない訳はないと鼓舞してみた。

とうまの家のキッチンにはちょっと訳が分かんない感じだけど、あくせられーたのは分かりやすいはずなんだよ。あんな不自由そうな身体なんだから。

そんな希望を持って足を踏み入れたキッチンは。

「……………何これ」

ハイテクというやつか、あの家よりもより一層複雑な機器が満載だった。

「……………本当に、何これ？」

おそらくコンロであろう機器には発火しそうな感じが一切なし。電子レンジはあの家の三十倍は複雑な造りになっているし、唯一使用法が分かりそうだった炊飯器に至っては。

「……………なんでこんなにたくさん？」

五つほど設置されていた。

これは、どういうこと？ 炊飯器って一つあれば事足りるはずだよな。……………もしかして、『グレゴリオの聖歌隊』みたいな並列詠唱の類なの？

まあ結局は詳細不明。技術云々の話ではない。機器の使用法すら全く理解不能だった。お礼がしたいのに。

「……………ねえ、あくせられーた」

呼びかける。「ああ？　なんだ？」といつづきらばつな応答が返ってくる。

インデックスは恥を忍んで、頼んだ。

「……これ全部、使い方教えて」

「礼される側がその手伝いするっつーのは、一体どオいうことなんだろオな」

「……私にも分かんないんだよ」

がつくりとうなだれるインデックス。しかしすぐさま視線を一方通行の手元へ固定する。コンロ、レンジ、炊飯器、その他諸々の用法や手順をそつやって記憶しているのだ。

それにしても、ぶつぶつと文句を垂れながらもなんだかんだ教授してくれている彼も、優しいものである。

最初から諦めて教えようともしないとうまとは大違いかも。

同居人に対して軽く苛立ちつつ、着実に手順を記憶していく。インデックスが間違えたりしないようにと、実に細かい部分まで丁寧に説明してくれる。この辺の気遣いが出るどころも、彼とは大違いだ。

やがて、

「っー訳だ。理解したか？」

「うん！　ありがとね！」

一方通行先生のキッチンの使用法講座が終了した。

「……………あア、どオモ」

一方通行はぶっきらぼうに呟き、リビングへは戻らず冷蔵庫へ向かう。「コーヒーコーヒー」と呟いているため、どうも喉が渴いているようだ。喋りすぎたのが原因だろう。

その間にインデックスは、さきほど習った各手順を脳内で反芻する。どのパネルをタッチすれば加熱出来るのかとか、全てを。

その状態であちこちに置いてある調味料も記憶する。あの家でもよく見るものから全く知らない未知の物体まで統括して数十種類あるが、まあどうせ使うのは二、三種類だろう。

調理器具も、壁に引っ掛かっているフライパンやら流し台下の収納スペースに収まっている鍋やらを全て記憶する。残りは食材の確認だが、現在は一方通行が冷蔵庫を漁っているため後回しだ。

ここにきて突然手持ち無沙汰になるインデックスだったが、今しがた記憶した調理器具に少し異常があることに気付いた。

これも、これも、あ、これも。……………ていうか全部だね。

それぞれを手にとって目を凝らしてみる。するとどうだろう、埃が大量に付着しているではないか。

この様子だと、どうやら長い間使用していないようだが、ならば一方通行は現在まで何をどうやって食べていたのだろう。外食オンリーなのだとしたら羨ましい限りだ。

とにかく、使うんだから洗わないとね。

フライパンを手に取り流し台に立つ。ちょうどその時、一方通行がコーヒーパー手に背後を通る。避けて流し台に密着し、フライパンを斜めに立てかけた状態で、インデックスはコックを一気に下げる。

途端。

フライパンに勢いよく反射した大量の水道水が、雨のようにインデックスと一方通行に降り注いだ。

「うー、びしょびしょに濡れちゃったんだよ……」

「……わざとか。そうか、わざとなんだなオマエ」

「ち、違うよ！ これは事故ってどうか……！」

「いや、そっちの話じゃねエ」

「？」

インデックスは首を傾げつつ、一方通行はうんざりした表情をしつつ、水浸しになったキッチン佇んでいた。

当然の如く二人も水浸しだ。白い服が肌に張り付いて、互いに直視しづらい状態に陥っている。

「……………」

おもむろに一方通行が歩きだした。びしゃっびしゃっ、と音を立てつつ廊下へ消え、一分ほどして戻ってくる。無造作に何かを投げつけてきた。タオルだ。  
さっさと拭けということなのだろう。

「えへへ、やっぱり優しいね、あくせられーたは」

「ああ？ ……気の抜けること言ってんじゃないよ」

褒めた途端に自分用のタオルで顔を拭きはじめる一方通行。一瞬まんざらでもなさそうな表情が見えたので、恥ずかしがっているのだと解釈した。

インデックスも顔や髪を拭きはじめる。季節の問題か、湿気はあまり取り除けなかったものの、水が滴るようなことはなくなった。

「……さて、これ拭かなきゃだね。ねえ、雑巾どこにある？」

訊ねると、面倒くさげに指を差す。新聞紙の束の傍に大量に積んであった。

「ありがとう」

一枚取って袖を捲る。ある程度濡いた状態にならない限りは拭いても逆効果だから、まずは濡いた雑巾で水分を吸収させるんだ。同居人からの教えである。

その調子で水浸しのキッチンに足を踏み入れて。

盛大に滑った。

「うわっ、わっ!?!」

倒れぬようと踏ん張るインデックス。しかし踏ん張ろうにも床は水浸し。滑るためどうにもならない。

そして、あるうことが。

「ぐはア!?!」

「わぶっ!?!」

一方通行にもたれかかってしまった。

杖をついてようやく立っていられる彼がインデックスを支えられる訳もなく、そのまま二人揃って勢いよく倒れ込んでしまう。

「痛っ!?!」

短い悲鳴が上がる。下敷きになった一方通行は後頭部を打ち付けたようで、目尻に涙を浮かべながら痛みを耐えている。

そして、彼をクッションにしたため大してダメージを負っていないインデックスはというと。

「!?!」

顔を真っ赤にし、声にならない悲鳴を上げていた。

原因は密着度と顔の距離。どちらかといえば後者の方が大きかった。

一方通行に抱き着くようにして倒れ込んだインデックスは、彼の胸に頭を乗せている。少し顔を上げると、視界いっぱい彼の顔が広がっているのだ。

同居人関連でこういった事態に慣れていたつもりインデックスだったが、相手が違うため羞恥のレベルが段違いだった。

一方通行も、しばらくしてから事態に気付いたようで、硬直している。さしもの彼も、このような事態には耐性がなかったらしい。

「……………」

妙にぼかぼかとしてくる。水浸しで冷えていた身体にはちょうどいいな、と一瞬現実逃避気味に思ったが、そういう問題でもないな、とすぐさま否定する。

おもむろに、一方通行が口を開いた。

「……………やっぱよオ、わざとなンだろ。さつきから」

「いや、その。事故、なんだけど……………」

「ねエよ。こんな事故そうそうねエよ」

呆れたような彼の視線とインデックスの視線が重なる。こんな異常な状況下だからか、その真紅の瞳が宝石のように綺麗に見えた。その状態で約十秒。非常に妙な気分になったところで。

「ただいまー！ ってミサカはミサカは定番の挨拶をかましてみた  
り！」

玄関の扉の開閉音と、少女の声が響いた。

「げ」



途端、一方通行の表情に明確な焦りが生まれた。インデックスはもはや状況が理解出来ず、眼を白黒させている。ドタドタと誰かが廊下を走る音が響く。同時に「一方通行！」という声も響く。

やがてリビングの扉が開いて。

「もー、ただいま」って言ったんだから“おかえり”って返してよー、ってミサカはミサカ　　は？」

茶髪で小柄で、どこかで見ることがあるような顔立ちの少女が現れた。

途中まで元気よく喋っていた彼女は、インデックス達の現状を確認した途端に啞然とした表情を作る。

やがて再び扉の開閉音が響いたのを皮切りに、茶髪の少女は。

「あ、ああああ一方通行が、女の子を家に連れ込んだ上に凄まじく淫靡な雰囲気醸し出してよー、ってミサカはミサカは興奮気味に語りつつ嫉妬の炎をメラメラと燃やしてみる！」

絶叫に近い声量で騒いだ。

一方通行が「醸し出してねエよ！」と反論する中、玄関の方からさらなる声が響いてくる。

「お、それ本当じゃんよ？」

「へえ。一方通行もやっぱり健全な男子だった、ということね。…でもそんなの今はどうでもいいわ。とにかく今は寝たいの。死にそうなのよ」

「桔梗、しつかりするじゃんよー」

妙に自然に話題がシフトしている。聴こえてきた二つの声の内、「じゃんじゃん」言っている方は大覇星祭の時に聴いた覚えがある。が、今はそんなことよりも。

え、え？ これ、どういうことなの？

この茶髪の少女と、しばらくして現れた二人の女性は一体何なのか、という方がインデックスには気になった。

お客様、という感じでもない。各々が手提げている買い物袋は、訪問客にはあまりに大きすぎる。

……そういえば、この家は一人で住むには些か広すぎる気がする。茶髪の少女も“ただいま”と言っていたし、同居でもしているのだろうか。

男一人、女三人で。

「……あ、そっか」

そこで、悟った。

「これが噂のハーレムなんだね」

違エよっ！！ と、直後に一方通行によって全力で否定された。

これが噂のハーレムなんだね（後書き）

人数が多くなってくると文章が粗くなってくる。

それが私、黒星です。

郷に入れば郷に従え、だ

水浸しの床を拭き終わり、ずぶ濡れの修道服も着替えたインデックスは、ソファアに座っていた。

二つ隣には一方通行が座っており、間には茶髪の少女が割り込んで不審そうにこちらを睨んでいる。

もう一つのソファアには疲労しきった様子の白衣の女性が横たわっており、もうスペースはない。

よって、家主であるという緑ジャージの女性が立ちっぱなしという少々おかしい状況に陥っている。

が、彼女は微塵も気にした様子はなく、ニコニコと微笑んでいた。

「あはは、改めていらっしやい。……で、あれじゃんよ。アンタは一方通行のガールフレンドか何かかな？」

「うーん、まだそんな段階ではないかも」

「ほほう、「まだ」、ねえ」

答えると、ニコニコがにやにやに変化した。ついでに、一方通行は面倒くさげに頬杖をつき、茶髪の少女の眼光が一層増す。

反応が、少しおかしい。

前もこんなことあったんだよ。

あの短髪の少女に「とうまのガールフレンドか何かなの？」と訊ねた時もそうだった。変に反応が大きいのだ。

今だって、ガールフレンド女友達か？ と訊ねられたので、まだ二、三回しか会

っていないし大した話もしていない彼とは、まだその段階ではないと答えただけなのだが。

……日本人と英国人の言葉に対する認識に齟齬があるように感じる。

「ふむふむ、なるほど。……あ、自己紹介がまだだったじゃんよ。といっても、大覇星祭の時に一度会ったと思うんだけど、……覚えてる?」

「屋台に向かう私を邪魔した“あんちすきる”の人だよな」

「お、光栄じゃんよ。よく覚えてたね」

「私は一度見た人のことは忘れないからね」

ふふん、と胸を張るインデックス。緑ジャージの女性は「なるほどなるほど」と呟きつつ、頷いた。

「なら話は早いじゃんよ。私はその“警備員”の一人、黄泉川愛穂。そこで横たわってんのは友人の芳川桔梗。で、……アンタは自分で名乗るじゃんよ」

「……打ち止め、ってミサカはミサカは敵意を隠しつつ自己紹介してみた」

それ隠せてないよね、と軽く呆れつつ、インデックスは各々の顔を眺めた。自己紹介の内容と照らし合わせ、正確に記憶する。

「うん、覚えた。あいほに、ききょうに、らすとおーだね」

それぞれを指差し、名前を声に出して相手に確認させる。黄泉川は「うん、全部正解」と称賛した後、今度は逆にこちらの名前を訊ねてくる。

「私の名前はね、インデックスっていうんだよ」

「へえ、変わった名前じゃん。ま、今後ともよろしくじゃんよインデックス」

「うん」

握手を交わす。横たわる芳川は動けないようなので口だけで挨拶し、残るは打ち止めのみとなる。

その打ち止めが難敵だった。

「……………」

「あー、らすとあーだー？」

インデックスの握手に応じてくれないのだ。

さきほど現れて以降頻りにこちらを睨み続けており、現在も継続中。何かカンに障ることをしただろうか。

「……………」

三十秒近く経っても一切応じない。インデックスにも我慢の限界というものがある。しかし、自制心というものもある。三十秒。あと三十秒だけ待ってあげよう。それでも応じなかったら、その見事に反り返ったアホ毛をいじくり回してやる。

……………やがて、その三十秒が経ちかけた途端。

「……おいクソガキ。早く済ませなエと、夕飯片付け終わるまでその柱に縛りつけンぞ」

「え！？ や、やだっ！ ってミサカはミサカはその光景を想像してゾツとしつつ、大事なお客様の手を取ってみたり！ よろしくね！」

「う、うん。よろしく」

一方通行の脅しにより狼狽しまくった末、ようやく握手が成立した。

「……恐ろしいことを言うんだね、あくせられーた」

「……のろいのは嫌エなんだよ」

さきほどとは一転して、インデックスのことを聖母を見るような眼差しで見詰め、寄り添ってくる打ち止めの頭を撫でつつ、呆れ気味に呟く。ぶっきらぼうに言い放った一方通行は、盛大にソファーにもたれかかった。

その一幕をにやにやと眺めていた黄泉川は。

「……で、そのインデックスは何しに家に来たじゃんよ？ 床水浸しにして」

さりげなく批難しつつ訊ねた。

インデックスは申し訳なさに頬を掻いて、控えめに、控えめに告げる。

「あくせられーたが無償でお昼ご飯奢ってくれようとしてくれたから、流石に申し訳ないなーって思ったので。……お返しに、私も何か食べさせてあげたいなーって」

「ん、つまり夕飯を作りに来たって訳じゃんよ？」

「うん」

頷くと、「ふむふむ、この娘かなりやるじゃんよ」とまたもにやにや微笑む黄泉川。訝しげに首を傾げるインデックスは、「……でもね」と少しうなだれる。

「私、実はほとんど料理経験がないんだよ。見たことは何度もあるんだけど」

「あア？ おいオマエ、そんなんで俺に飯作ってやるなんて言っただったのか？」

「……ごめん、少し気が逸っちゃって」

「まあまあ、別にいいじゃんよ一方通行。それに、逆に言えばそれでもどうしてもアンタにお礼がしたかったってことじゃんよ。良い娘じゃん」

羨ましい限りじゃんよ、と一方通行の肩をバンバン叩く黄泉川。やがて鬱陶しがる彼を尻目に、ポン、と自身の胸を叩く。

そして。

「よしっ！ それならこの黄泉川愛穂先生に任せるじゃんよー！」



そう宣言した。

「料理初心者にはハンバーグだの肉じゃがだの調整がややこしい料理を奨めるつもりはない。故に比較的簡単で、初等教育でも真つ先に習うカレーの作り方を教えるじゃんよ」

「了解なんだよ！」

インデックスと黄泉川が立つのはキッチン。目の前には、まな板や包丁、数種類の野菜、そしてカレーのルーが置いてある。

「さて。じゃあまず手本を見せるじゃんよ」

「はい先生！」

良い返事じゃん、とまな板の前に立つ黄泉川。右手に包丁、左手ににんじんをセットしている。インデックスはその傍らに立って手元を観察していた。

やがて包丁が上下に動き、にんじんが乱切りされていく。

「切り方は基本的になんでもいいじゃんよ。まあいずれにせよ、こんな感じに一口大に切るのがベストじゃん」

「なるほどー」

今の動きを明確に記憶する。流石女性。包丁捌きが流麗すぎて同

居人とは比較にならない。

黄泉川が、包丁を手渡してくる。

「やってみるじゃん」

「はい！」

黄泉川が横にスライドしたことにより空いたスペースに入り込むインデックス。包丁と野菜を記憶した通りにセットし、記憶通り、恐る恐る乱切りにチャレンジしてみる。

「お！ 凄く上手く出来てるじゃんよ。本当に初めてなの？」

「うん。生まれてこの方包丁なんて持ったこと（多分）ないんだよ」

「物分かりの良い優秀な生徒じゃんよ」

何故か若干つまらなそうな表情になる黄泉川。インデックスが首を傾げていると、次を促してくる。

「残りの野菜も、その調子で切るじゃんよ」

「はい」

とんとんとんざくざくざくざく、としばらく音が鳴り続ける。やがてまな板の上には、一口大に切られた野菜が大量に積まれた。

黄泉川はそこで腰に手を当て、口を開く。

「さて、それではこの切った野菜を」

「あ、知ってるんだよ。お鍋で煮」

「ルーや水と一緒に炊飯器にぶち込むじゃんよ」

「Why?」

思わず地が出た。

それほどに、今の発言は理解不能だった。

「……え、炊飯器？ 炊飯器はご飯を炊くものじゃないの？」

「そうじゃん。現に今、この一番左の炊飯器が炊飯の真っ最中じゃんよ」

「？ じ、じゃあ何でこれを炊飯器に？ カレー作るんじゃないの？」

「そうじゃん。だから炊飯器にぶち込むじゃんよ」

「?????」

黄泉川の言っていることが全く理解出来ず、救いを求めるように打ち止めと芳川を見るインデックス。しかし彼女達は、無言で気まぐすそくに視線を逸らすのみ。

「あ、あくせられーた……」

最後に一方通行に助けを求める。彼は溜め息をついて、面倒くさげにインデックスと視線を重ねる。

「……オマエに、いい言葉を教えてやるよ」

「う、うん！」

そう告げる彼に、インデックスは視線に込める期待をより一層強める。腕に取り付けたトンファーのような杖が弧を描いてインデックスに向けられた後、一方通行の口から“いい言葉”が語られた。

「……郷に入れば郷に従え、だ」

「………な、何の解決にもなっていないかも！」

ちょっとあくせられーた！？ と、批難の言葉を浴びせるが、彼も他二人と同じく気まずそうに視線を逸らす。

肩を落とすインデックスに、黄泉川は。

「そういうことじゃんよ。……ま、安心しなさい。炊飯器は何でも出来る万能の一品じゃん」

何故か誇らしげに宣言した。

郷に入れば郷に従え、だ（後書き）

White x Whiteなんてタイトルでありながらインデックス  
と一方通行の絡みが極端に少ないという。

私、ここに居ていいの？

カレーが出来上がるまでの間、打ち止めと共にスフィックスと戯れていると、ふと黄泉川に呼ばれた。どうやらカレーが出来上がったようだ。

ハンドソープを用いて入念に手を洗い、五人分の皿を用意して炊飯器の前に立つ。

「ほら、開けてみるじゃんよ」

「う、うん」

促され、開閉スイッチをタッチする。炊飯器でカレーを調理するなんていう発想がそもそもなかったため、一体どんな仕上がりになっているのか見当もつかず、正直不安でいっぱいだ。そうして現れたものは。

「こ、これは……！？」

スパイシーな薫り漂う、見事なカレーだった。

黄泉川がスプーンで少し掬って口に運ぶ。しばらく咀嚼した後親指を立てる。味に問題はなかったらしい。

「やったー！」

初めての料理（？）の成功に、飛び上がって喜びを表現するインデックス。落ちる際に腰を台にぶつけてうずくまる。

やがてそれぞれの皿に、別の炊飯器で炊かれた白米とカレーをよそい、テーブルへ運びはじめた。

「ほら、打ち止め、一方通行。それに桔梗も、さっさと手洗ってくるじゃんよ」

その間に黄泉川は、学校の先生らしく三人に命じる。もう習慣と化しているのか、打ち止めはとてとと小走り、芳川はけだるげに、一方通行は溜め息をつきながらのろのろと洗面所へ向かう。「のろいのは嫌いなんじゃないやなかったの？」と訊ねたら「うるせエよ」と返された。

やがて手洗いを終えた面々や黄泉川が席につき、調理の間に倉庫から引つ張り出しておいたという椅子にインデックスも座り込む。

そして、告げる。

「はい、公言通り作ったんだよ！ 最終行程全部炊飯器任せだったから“私が作った”って言えるかどうかは甚だ疑問ではあるけど」

「野菜は九割方あなたが刻んだんでしょ。ならあなたの料理よ」

芳川が擁護してくれる。黄泉川も打ち止めも頷いているし、まあそういうことでいいのだろう。

「さて、では」

黄泉川が仕切るように言いつつ手を合わせる。打ち止めも芳川もそれに続いて、なんとあの一方通行までもがけだるげに続く。そのことに啞然としてみると、全員がこちらを見ていることに気付いた。ハツとしてインデックスも手を合わせる。

「 うん、よし。それじゃ、いただきますじゃんよ」

『いただきます』

皆が食事をはじめ。インデックスはツボに入ってくすくす笑いつつ顔を手で覆う。

「何を笑ってるの？ ってミサカはミサカは首を傾げてみる」

言った通り首を傾げた打ち止めが訊ねてくる。インデックスは左手で口元を抑えて右手で待ったをかける。

やがて衝動が少し治まってきたところで、目尻に浮かんだ涙を拭いっつ告げた。

「あ、あくせられーたが、手を合わせていただきますしてる光景があまりに意外で愉快でツボに入っちゃって……あははっ！」

「あア！？」

一方通行が声を荒げる。自分でもその光景の愉快さは理解しているようで、真っ白な肌に分かりやすく朱が注している。

「あはは、その気持ちはよく分かるじゃんよ」

「ミサカ達も初めて見た時は笑いが止まらなかったもんね、ってミサカはミサカは回想しつつ微笑んでみたり」

黄泉川も打ち止めも同意する。芳川も顔を背けてくすくす笑っていた。



「 つ！ テメエらしい加減に 」

「はいストロップ、ってミサカはミサカはあなたの身体制御能力を没収してみたり」

一方通行が杖を振り上げ振り下ろそうとするも、打ち止めがそう咳いた途端にまるで身体中から力が抜けたように椅子にもたれかかり、盛大に後ろに倒れる。インデックスが眼を白黒させていると、何故か身動きをとらない一方通行が批難の言葉を口にする。

「おいこらクソガキ！ 演算切ってンじゃねエよ、早く戻しやがれ つ！」

「やだよー、ってミサカはミサカは要望を却下してみたり。それより、ついでに痛覚も切つといてあげたミサカに感謝するといいよって、ミサカはミサカは恩着せがましく言い放ってみたり！」

「そりゃありがたいがとつございますねエっ！？ でもよオ、それ戻したらあらゆる痛みが一気に襲ってきて余計に痛エだろオがよ！」

訳の分からない会話。芳川に説明を求めるが、「まあそういう関係性なのよ」と適当にはぐらかされた。

「…………それよりほら、せつかくお客様が作ってくれたカレーが冷めて台なしになるじゃん。遊んでないでさっさと戻すじゃんよ打ち止め」

「むー仕方ないなあ、ってミサカはミサカは一方通行の身体の演算を再開させてみる」

打ち止めが遊び足りない子供のようにはやくと、一方通行の身体がぴくりと動いた。途端、「ぐおオオオッ!？」と悲鳴が上がる。

それからまた一悶着あったものの、割愛する。

「おいしいー、ってミサカはミサカは惜しめない称賛をシスターさんに贈ってみたり」

「ありがとね、らすとおーだー。そして私はインデックスだよ?」

カレーを一口食べた打ち止めがアホ毛から微弱な電気を放ちつつ褒めてくる。黄泉川も芳川も同じような反応。嬉しくな、って思わず顔が綻ぶ。

しかし、彼女が本当に感想を求めている人物は、打ち止め達ではなくあの白い少年なのだ。

じーっと全員で見詰める。非常に居心地が悪そうにしている一方通行は、ゆっくりとカレーを口に運ぶ。

咀嚼し、飲み込む。その段階で、インデックスは訊ねた。

「どっ?」

「あん? 何が?」

「味」

考え込むような動作を見せる一方通行。インデックスは期待と不安を込めた視線を送る。

やがて。

「……まア、まずはねエな」

彼なりの称賛が贈られた。

……その後、喜びのあまり座ったまま飛び上がったインデックスは椅子ごと後ろに倒れた。

「……さて、じゃあもうそろそろ私はおいとましないかね」

夕飯を食べ終わり、一時間ほど打ち止めと戯れた後、時計を見上げつつインデックスは言った。

午後七時。他人の家にお邪魔していていい時間はとうに過ぎていく。

「えー、もうちょっと居ようよー、ってミサカはミサカは駄々っ子のように交渉してみたり」

当初とは打って変わって言った通り駄々っ子のように甘えてくる打ち止めを宥める。

その上で、言った。

「ごめんね。でもこれ以上お邪魔するのも悪いし、外もう真っ暗だし。……“すぎるあつと”ってというのが動き出す前に帰りたいの」

「そっかあ、なら仕方ないね、ってミサカはミサカはがっくり肩を

落としてみる」

打ち止めが剥がれる。インデックスは軽くアホ毛を遊び、ようやく乾いた修道服に着替え、鞆を持ち上げる。

そこで、芳川に求人雑誌を見せていた黄泉川が訊ねた。

「帰るの？」

「うん。色々ありがとね、あいほ」

「そっか。……ま、気をつけて帰るじゃんよ」

「うん」

手を振る黄泉川。芳川も打ち止めも続く。

振り返し、廊下に出るインデックス。そこで、用足しを済ませた一方通行とバツチリ目が合った。

一方通行はこちらの姿を見て顎を押さえる。「帰るのか？」と、言われている気がした。

「……家に帰るんだよ」

「そおか。……いや、でもオマエ……」

「？」

妙に歯切れが悪い一方通行に、インデックスは首を傾げる。そんな時、リビングの黄泉川から声がかかった。

「一方通行、送ってあげるじゃんよ」

「あア？」

「夜道をか弱い女の子一人で歩かせる気か？ アンタがボディガードしてやるじゃん」

聴きつつ、「承諾する訳ない」とインデックスは思った。現在も渋っているし、元々そんな性格ではなさそうだから。しかし、予想に反して。

「……分かった。おい、少し待ってる、手洗ってくる」

「あ、うん」

一方通行は承諾した。心なしか素早く洗面所へ入り、十秒も経たない内に出てくる。玄関に引っかけられていたやはり真っ白なコートを羽織り、促す。

「何してんだ、早くしやがれ」

「う、うん」

一方通行が先に扉を開けて出ていく。インデックスも、「じゃあねー、ってミサカはミサカは」と叫ぶ打ち止めにもう一度別れを告げ、スフィックスを呼び、続く。

「チツ、降りてる最中か」

エレベーターのボタンをがちがち押しまくり、不満げに一方通行が呟く。インデックスはそんな彼を宥めて、なんとなく隣に立つ。

「……………」

会話がな。面白いくらいに静寂で、聴こえる音といたら、時々遠くから響く車のクラクションのみだ。

スフィックスを弄りはじめた。「みゃー!?」と悲鳴が上がり、少し楽しくなってくる。

そこで、一方通行が口を開いた。

「………… オマエ、帰っても誰もいねエンだろ」

インデックスの手が止まる。スフィックスが解放され、僅かに距離をとる。

再び少し静寂が流れ、おもむろにインデックスは訊ねた。

「………… 何でそう思うの?」

まず、と一方通行は指を一本立てる。

「今は冬休みつつー長期休暇中だ。前みたいな平日じゃねエ。なのに状況が前と同じってのはおかしいだろ」

次に、と二本目の指が立つ。

「さっきチラッと見えた鞆の中身。ありゃあ明らかに外泊用の荷物だ。そんなン持ってウロウロしてたってことは、誰か知り合いの家に泊めてもらおうと思っていたが当てが外れた…………… っるところだろ  
オ」

彼は、二本の指が立てられたその手をインデックスに突き出し、

告げる。

「その二つを統合すると、まア、そういう結論に至るっつー訳だ」

「……………」

インデックスは呆然と一方通行を見詰める。改めて凄いと思った。少なくとも、自分ではその程度の情報で事情を察することなど出来ない。

エレベーターの階数表示の十二階部分が点滅する。もうすぐこの階に到着するだろう。

インデックスは、なるべく感情を押し殺して、再び訊ねた。

「……………だとしたら、どうするの？ 泊めてやる、なんて言わないよね？」

エレベーターが到着し、扉が開く。黙り込む一方通行を見て溜め息をついたインデックスはすぐさま乗り込もうとする。

それを一方通行は制した。

制して、言った。

「……………あア、そオだ。俺が言えた立場じゃねエが、泊めてやるよ」

「えっ？」

驚いて声を上げる。扉の閉まったエレベーターが、下の階で誰かが押したらしく降下していく。

インデックスは慌てた様子で、おろおろと呟く。

「で、でも迷惑だろうし、その……」

「……あのなア。オマ工程度で迷惑だったら、あのクソガキは一体何なんだ？」

呆れたように溜め息をついて、親指でグツ、と黄泉川家を差す。クソガキとはおそらく打ち止めのことだろう。

はた迷惑なくらいに天真爛漫な少女。確かに彼女に比べれば、自分などかわいいものなのかもしれない。

一方通行はさらに続ける。

「それに多分、黄泉川も反対しねエ。芳川もなんだかんた楽しげだった。クソガキも結局懐いてたみてエだし、泊まるとなりやあ喜ぶだろオよ」

それによオ、と彼の語りはまだまだ続く。

「……もし、もしだ。誰もいねエ家にオマエが帰って餓死でもしてみろ。泊めなかった俺らが悪イみてエで寝覚めが悪イだろオが」

ぶつきらぼうに物騒な例えをする一方通行。おそらくは、これが本音なのだろう。

黄泉川や芳川や打ち止めがどうだのというのは建前だ。“自分と関わった人間に不幸になってもらいたくない”という願望こそが、彼の本音。

それに、インデックスは。

「……本当に、本当にいいの？ 私、ここに居ていいの？」

「いいつつってんだろオが。……何度も言わせんじゃねエよ」



またぶっきらぼうに呟いて一方通行は踵を返す。その前に立ち塞がって彼女は手を取る。

取って満面の笑みを浮かべて、言った。

「ありがとう、あくせられーたっ」

「ッ。……お、おオ」

珍しく、一方通行が照れた様子だった。

私、ここに居ていいの？（後書き）

お泊り決定

## あなたと同じなの

上条が帰ってくるまで黄泉川家に居候させてもらうことになった  
インデックス。

黄泉川をはじめ他の居候二人も快く承諾してくれ、当面の危機も  
まあ去った。

そんな訳で、現在彼女は どうしているのかというと……。

「……………」

「げ、元気出して、ってミサカはミサカは同じ感覚を味わった同士  
としてあなたを励ましてみる！」

敗北感に打ちひしがれて、ソファで三角座りしていた。

彼女はさきほどまで、「風呂の使い方教えとくじゃん」とのたま  
う黄泉川と共に入浴していたのだ。

……………そこでちよっくら、目を背けていた現実と直面してしまった  
訳である。

「……………化物。あれはもう化物なんだよ」

「うん分かる、分かるよ、ってミサカはミサカは同意しつつ、外人  
さんなんだから将来に期待しようって希望を与えてみたり！」

「……………それは、本当に将来に希望が残された人のみか口に来るセ  
リフかも」

呻くような声で返す。すると何故か、打ち止めも隣で三角座りをはじめた。

「どうしたの？」

「……お姉様を見る限り、あまり希望があるようには思えないんだ、ってミサカはミサカは重々しく心情を吐露してみる」

「そっか。……先が見えてると、やっぱり余計に辛いの？」

「……うん。正に夢もキボーもないってやつかな？ ってミサカはミサカはある人物の口癖を真似つつうなだれてみたり」

やるせない気分になりつつ、互いに見つめ合っどちらともなく抱き合う。その光景を遠巻きに眺めていた一方通行は、心底呆れた様子で溜め息をついた。

「……茶番やってンじゃねエよ」

「茶番？ 私達はいたって本気なんだよ！」

「そうだそうだー、ってミサカはミサカは後に続いてみたり！」

あなたなんか女の子の気持ち分かるものかー、と二人して喚く。「くったらねエ」と吐き捨てた一方通行は、深々と椅子に座り込んだ。

「お。何揉めてるじゃんよ」

その時ちょうど、黄泉川がリビングに入ってきた。背後では、未

だに疲労の色が濃い芳川が猫背でのろのろ歩いている。

芳川をソファーに寝かせた彼女は、インデックス達の前にしゃがみ込み、訊ねる。

「原因は何？ 黄泉川お姉さんに話してみるじゃん」

「……………」

その“原因”を、親の仇を見るような鋭い眼差しで無言で睨みつける二人。気付いていないようで、今度は一方通行に訊ねる黄泉川。「俺が知るかよ」と返答された。

「ま、言いたくないんなら別に構わないじゃんよ。……それより二人ともそこを退くじゃん。私はこれから、録画しておいた“一一一の一月無人島生活”を見るじゃんよ」

ほら退いた退いたー、と掃われる二人。ゆったりと落ち込める場所さえ失い、仕方なく椅子の方へ座り、テーブルへ突っ伏す。対面の一方通行は心底鬱陶しがっている様子だったが、無視した。

一方通行が携帯を弄る音とテレビの音が響く。それ以外の音といったら時々上がる黄泉川の笑い声くらいだ。

何この仲の悪い家族みたいな雰囲気？ とインデックスが居心地悪そうにしていると。

「おい、チビシスター。一つ訊いていいか？」

ふと、一方通行が声をかけてきた。

「インデックスなんだよ！ ……で、何？」

「前に聞いた時からずっと気になってたんだがよオ、ありやあどオ  
という意味なんだ？」

「？ あれって？」

「一度見た人のことは忘れない”ってやつだ」

携帯を閉じ、頬杖をついて質問を口にする。むくりと上体を起こしたインデックスは、しばらく考えるような素振りを見せた後、窓の外を眺めはじめる。

その上で、一方通行に言った。

「……こうやって話してる時、街の光が七つ消えた」

「あん？」

「テレビからは誰かが水の中に落ちる音がして、あいほが笑ってる。そうしていると今度は三つの光が街から消えた」

「……何言ってるんだ？」

「私が今しがた記憶した出来事だよ。私はそれを死ぬまで忘れないの」

そこでインデックスは一方通行に向き直り、告げる。

「完全記憶能力。見たもの聴いたものを、たとえどんな些細なことでも明確にいつまでも記憶する。私が持っている才能なんだよ」

「それが“開発”で得たあなたの能力なの？　ってミサカはミサカは唐突に話に割り込んでみたり！」

打ち止めが顔だけ上げて訊ねてくる。インデックスはふるふると首を横に振り、否定する。

「違うんだよ。これは生まれた時から備わっていたただの才能。…  
…というか、そもそも私は“開発”は受けてないかも」

途端、テレビから音が消えた。見ると、黄泉川が一時停止ボタンを押したようで、俳優が魚を釣り上げた場面で停止している。

黄泉川は顔だけこちらへ向けて、心なしか険しい表情で言った。

「それは聞き捨てならないじゃん。学園都市の住民は、私達みたいな“外側”から来た大人を除けば全員“開発”を受けているはず。アンタは見た感じ明らかに大人じゃない。“開発”を受けていなければおかしいじゃんよ」

まあ月詠先生みたいな例外がない訳でもないけど、と付け加えるように呟く黄泉川。インデックスは、「今のは失言だったなあ」と今更後悔した。

彼女達は、上条や姫神と違って魔術サイドとは一切関係のない人間のはずだ。ならインデックスの立場を説明したところで理解出来る訳もない。ここは無駄な混乱を避けるために、「完全記憶能力は超能力」だと嘘をつくべきだった。

黄泉川がじつ、とこちらを見詰めてくる。「答えるまで追及し続ける」と、学園都市の治安維持担当の警備員は眼で語っている。

下手な言い訳はおそらく無駄。ならばここは。

「……私はね、言うなれば外交のために隣国に嫁いだお姫様なんだ

よ

当たらずも遠からずといった内容で、魔術サイド関連のことをぼかして乗り切るうとした。

が、その発言に皆がぼかん、としている。インデックスは急に恥ずかしくなつて、言い直した。

「ごめん、今のはちょっとメルヘンチックすぎた。……えっと、あなた達に分かりやすい例えだと、まあ、核弾頭が妥当かも」

「いやいや今度はいくらなんでも物騒すぎるよ、ってミサ力はミサ力は空気を読まずにダメ出ししてみる」

自己申告した通りダメ出しされる。しかしインデックス的には、「お姫様」より「核弾頭」の方が状況にはピッタリだと、言った後に思った。

「一応私にも超能力 的な力はあるの。だけど、……その力は“世界を滅ぼす力”って言っても過言ではないものなんだよね」

ある単語に一方通行が反応する。彼女はそれには気付かず、慎重に言葉を選んで続ける。

「だから戦争の抑止力にもなるし火種にもなる。それでそういった事態に発展することを極力防ぐために、“外側”からの干渉がしづらくて、私の力が一切利益を生まない学園都市に預けられてるの。だから“開発”は受けてないんだよ」

これ以上はもう話せないかも、と最後に付け加える。



『……………』

静寂が流れる。今のを冗談だと受けとったのならこの空気は呆れられているのが原因なのだが、皆一様に神妙な面持ちをしているためその線はない。  
ならばこれは。

恐れてる。ってことかな。

当然と言えば当然だ。何せ“核弾頭”だ。そんなものが眼前にあると知れば、恐怖するのは必定。

追い出される、かな？

それも仕方ないと思う。そんな危険な存在と一つ屋根の下で過ごすなど、耐えられるものではないから。

……しかし、インデックスの予想は大きく外れることとなる。

「そっか。ま、別にいいじゃんよ。……それよりバラエティーバラエティー」

黄泉川は軽く流し、テレビ鑑賞を再開した。「あれ？」と首を傾げていると、今度は打ち止めが袖を引っ張ってくる。

「ねーねーシスターさん、ゲームしよー、ってミサカはミサカは要望を口にしてみたり！」

「え？」

「ダメだクソガキ。オマエはさっさと風呂入りやがれ。後がつかえてんだよ」

「えー。……仕方ないなー、ってミサカはミサカは不平を漏らしつつ、駄々をこねたらお仕置きされる予感がするのでダッシュでお風呂に向かってみたり」

一方通行の言葉により、打ち止めが小走りで風呂場まで向かう。彼は溜め息をついて椅子に深めに座りなおす。

……平常だ。話す前となんら変わらない平常。  
インデックスは、思わず訊ねた。

「……怖くないの？」

「あア、何が？」

「私の力」

大きく欠伸をする一方通行。それに対し今日一番の驚いた表情を見せるインデックスに、一方通行は。

「……別に？ 二ヶ月前の戦争知ってんだろ？ あん時そのレベルの力なんて腐るほど見た。今更怖がるほどのモンでもねエだろ」

「そ、そついうものなのかな？」

「そオいうモンだ。……そんなことより、今はもっと重要なことがある」

そう言って立ち上がった。杖で上手いことバランスをとって、澱みなく冷蔵庫まで歩く。取り出した缶コーヒーをインデックスに突き付け、その“重要なこと”を口にした。

「今晚オマエはどこで寝りやいいのか、決めねエとな」

インデックスは一方通行の寝室で就寝することとなった。誤解を招かぬよう付け加えておくと、一方通行が明け渡した形なので寝室にはインデックス一人だ（ちなみに彼はソファで寝ると言っていた）。

そんな訳で彼女は、布団を被ってから既に三時間以上経過した現在、未だに眠りにつけずにいた。

環境が変わると何故か眠りづらくなるという、あれである。

まずい、まずいんだよ。もう日付変わってるよ確実に。

眠ろうと焦って余計に眠れなくなるという悪循環に嵌まってどうしようもない。「明日はちょっと早めに起こすじゃんよ」と黄泉川も言っていたし、早急に眠らねばならないのに。

「……よし、一度落ち着こう」

布団を跳ね退け立ち上がる。“落ち着ける空間”へ行こうと、取っ手に手をかける。

そこで、声を耳にした。

「あア、分かった。二、三分後くれエにマンションの前まで来てくれ」

あくせられーた？

リビングで既に眠っているかと思っていた一方通行の声だ。この様子だと、携帯で誰かと話しているのだろう。

携帯を閉じる音が静寂しきった家に響く。ついで歩行音が響き、反射的に息をひそめる。

「？」

今度は微かに布同士が擦れる音が聴こえた。玄関に向かっていたようだし、コートを羽織っているのだろう。

五秒も経たないうちに玄関の扉が静かに開く音がし、直後に静かに閉じる音がする。そのタイミングで、インデックスは部屋を出た。玄関まで行ってみると、彼のコートと靴がないことに気付いた。どうやら外出したようだ。あの口ぶりからすると、誰かと待ち合わせしているのかもしれない。

……気になる。

「……こっそり、バレないように尾行しよう」

インデックスもコート（誰のかは不明）を羽織り、靴を履く。少し間を置いてから、扉に手をかける。  
するど。

「待って、ってミサカはミサカは小声で呼びかけてみたり」

袖を引つ張られた。見ると、いつ部屋から出てきたのか、打ち止めが寒さに震えながら立っている。

インデックスは慌てて打ち止め用のコートを手渡し、羽織ったのを確認した上で訊ねる。

「なんで止めるの？ こんな時間に外出したんだよ。気にならないの？」

「……ならないことはないけど、ってミサカはミサカは僅かな好奇心をあらわにしつつそれでもあなたを止めてみる」

打ち止めは袖を離さない。インデックスには理解出来ない。

「あくせられーた、あんなに身体不自由そうなのに。もし、すぎるあつとつていうのに襲われちゃったどうするの？」

「その心配はないよ。それに、たとえ襲われたところであの人は傷一つ負わないし、ってミサカはミサカは宣言してみる」

「？ どういうこと？」

訊ねるインデックスに、打ち止めは考えるような素振りを見せる。そうした後、彼女は一つの事実を重々しい口調で告げた。

「……一方通行は、あなたと同じなの、ってミサカはミサカはシスターさんの発言を思い返しつつ告げてみたり」

「……同じ？」

首を傾げる。自分の発言に何か彼と共通するような言葉などあつ

ただらうか。

「……うん。つまりね、一方通行も“世界を滅ぼす力”を持つてるの、ってミサカはミサカは真実を暴露してみる」

「！」

インデックスの表情が変わる。打ち止めは目を閉じ、何かを思い出すように続ける。

「一方通行は、学園都市の頂点に君臨してる最強の超能力者なんだ、ってミサカはミサカは学園都市住民の常識をあなたに伝えてみる。だからあの人に勝てる人類なんていないんだよ、ってミサカはミサカはまるで自分のことのように誇らしげに語ってみたり」

まあ何人か例外はいるみたいだけど、と付け加えて若干落胆したような表情になる。インデックスとしては、戦闘面に関してはほとんど一方的に暴行を受けていたイメージしかなかったのだが。

あ、でもあの翼は……。

ふと思い当たる。あの日見たあの黒い翼は、確かにそのレベルの力を誇っていたように思える。

「……だからかな、あの人、学園都市内でも立場が特殊すぎて、……暗部？ に関わってるみたいなんだよね、ってミサカはミサカはあの人が隠し通せているつもりの事実を口にしてみたり」

「……よく分かんないけど、それってやっぱり危険んじゃないの？」

「だろうね。でも一方通行ならまず心配はないし、万が一不利な状況になっても仲間がいるみたいだからやっぱり安心なんだ、ってミサカはミサカはニッコリと微笑んでみたり！」

打ち止めが袖を離す。解放された形になるが、インデックスは動かなかつた。

動かない代わりに、一言言った。

「……信頼してるんだね」

「うん！ ってミサカはミサカは返事をしつつ、お花を摘みに個室にインしてみたり」

打ち止めが“個室”に消える。取り残されたインデックスは、「私も入りたかったのに……」と軽くうなだれる。

うなだれて、扉を見詰めた。

真っ白で、“世界を滅ぼす力”を持っている。

そこで一方通行の顔を思い浮かべて、

なんか、余計に親近感が湧いたかも。

なんとなく、そう思った。

あなたと同じなの（後書き）

こんなテンションの話をして、後にバトルストーリーが発生する可能性は皆無です。



## 私も着物欲しいかも

『いやー、まさかお前の方から電話かかってくるとはなー』

十二月三十一日、元旦。

朝食をとり終え、仕事があるからと黄泉川が外出した後、インデックスは手持ちの0円携帯で上条に電話をかけていた。

一方通行達は何やら用事があるそうなのでその準備中。一応インデックスもついて行くことになったのだが、準備は手伝わっていない。むしろ、手伝えることがない。

だから、昨夜の内に打ち止めに使用法を教わっておいた携帯で同居人に電話をかけて暇を潰しているのである。

「ふふん。私だっていつまでも機械オンチのままじゃないんだよ」

胸を張るインデックス。『ははは』という笑い声が携帯越しに響いてくる。

『……で、昨日はどうだったんだ？ 飯とか、ちゃんと食ったのか？』

「心配ないんだよ」

『そっか。……何か微かに女の子っぽい声が聴こえるんだが、結局小萌先生のところに泊まってるんだな』

「違つよっ？」

『え?』

予想外のことを知らされた人間特有の声上がる。女の子っぽい声というのは打ち止めの声のことだろうが、……それをよりによって小萌の声と勘違いするとは。

「とうまはこもえに怒られても文句は言えないかも」

『え、何で? ……じゃなくて、先生のところじゃなかったらお前どこに泊まってんの? 絶対俺の部屋じゃないよな、今お前がいるの』

「そうだね、違うところだよ。それがどうしたの?」

『いや、「どうしたの?」じゃねえよ? え、本当、どこに泊まってんの?』

口調が娘を心配するお父さんのようだ。まあ一応“保護者”ではあるから、当然と言えば当然だろう。

……となると、一方通行のことは伏せた方が得策だろう。男だから。

「……あいほの家だよ」

『あいほ? ……誰だ? お前の知り合いか?』

「もう、何言ってるの。とうまも面識あるでしょ。大覇星祭の時に私達を通行止めした“あんちすきる”の女の人だよ」

『警備員? ……あ、何だ黄泉川先生のことか。お前、黄泉川先生

の家に泊まってるの?』

「その通りなんだよ」

ようやく思い出してくれたようで、口調から安心した様子が伝わってくる。これで心配をかけることはなくなりそうだ。

『そっか。まあどういついきさつがあったのかは知らないけど、警備員の家なら安心だな』

「うん」

肯定する。すると、携帯越しに玄関の扉が開閉する音が響いた。

「誰か来ちゃった?」

『ああ、うん。悪いなインデックス。ちょっと待ってるよ』

「うん」

携帯をどこかに置いたらしい音が響くと同時に、木を踏むような音が聴こえてくる。ついで室内の扉を開くような音が聴こえ、

『やつほー、美琴さんが来てあげたわよー!』

そんな声が響いた。

「!?!」

予想外すぎて思わず携帯を手放しそうになるインデックス。慌て

て持ち直し、全力で聞き耳を立てる。

『おはよう。お母さんとお父さんは少し遅れるからね。……って、もしかして、電話中だった？』

『ああ、まあ』

『ごめんごめん。続けていいわよ』

『オツケー』

そんなやり取りが行われた後、携帯を手に取る音が響く。直後に上条の声が伝わってくるが……。

『もしもし、イン』

「Stay。とうまStayだよ」

遮った。『何だ。妙に発音いいな』と感心したような声を上げる彼に、インデックスは不機嫌声で訊ねる。

「うん。おかしいなあ、おかしいなあ？ 私の耳には今確かに短髪の声が聴こえたんだけどなあ？」

『？ ああ、だろうな。今来たし』

「そんな「何を当たり前のことを」みたいな呆れた声を上げないでほしいかも」

上条は流そうとしている。いや、意識的ではないかもしれないが、

とにかくこのまま行くと流される。

「……ちょっと確認したいんだけど、何でとうまの実家に短髪が訪問してくるのかな？」

「ん？ ああ、それはあれだよ。俺の両親と御坂の両親がな、いつの間にやら結構親しい間柄になってたんだよ。それで」

それで、上条と美琴はどうも同じタイミングで帰省したらしく、せつかくだからと美琴の母親が自宅に上条家を招待したそうだ。名目は夕食のお誘い。

そのままなんだかんだあり、年の瀬や元旦も同じようにして過ごすことが決定したらしい（ローテーション式で、今日は上条家）。

「分かったか？」

「うん、うん。理解した。そして今本気で後悔したんだよ」

『？』

不思議がっている様子。「こちらの気も知らないで……。馬鹿ととうま」と内心で毒づく。

しばらく間を置いた後に、とりあえず釘を刺しておく。

「とうま、短髪に手を出したらただじゃおかないんだよ」

『ばっ！？ だ、出すわけねえだろ！ アイツ中学生だぞ！？』

「多分もう遅いだろうけど、短髪にちゃんと謝っとくのが得策かも」

途端に上条が呻いた。鈍い音が響いたため、打撃をもらったものと思われる。

「おいチビシスター。行くぞ、早くしやがれ」

外出の準備を終えたらしい一方通行が声をかけてきた。打ち止めと芳川も既に玄関にスタンバイしている。

「あ、はい。……それじゃあね、とうま」

『いってえ……。え、あ、うん。……うん？　ちょっと待て、今男の声が』

「じゃあね！」

追及されそうになったが、強制的に通話を切って回避した。

街中に繰り出した一行は、ある店を目指してわりと急ぎ足で歩いていた。

その店とは、大型デパート『セブンスミスト』。本日そこに、打ち止めが前々から注文していた初詣用の着物を受け取りに行くのだそう。

「ほとんどの人が帰省したものと思ってたけど、案外人多いよね」

「そりゃあ帰りたくねエって奴もいるからな」

「あくせられーたもその部類？」

「……ま、そんなところだ」

そんな会話をしつつ、はしゃいで先行しまくってる打ち止めや、  
疲れて一人遅れている芳川とはぐれないよう注意する。

さきほども言った通り、まだ案外人が多い。もしはぐれたら結構  
面倒だ。

「ほら、らすとおーだー。走っちゃだめなんだよー！」

「ふふーん。今のミサカはそのような言葉で止まるほどやわではな  
い、ってミサカはミサカはシスターさんに宣言してみる！」

「いや、意味が分かんないんかも！？ らすとおーだー！？」

依然として打ち止めは走り続ける。それも前を見ずに。  
そんな注意力散漫な状態だったから。

路地裏から現れた女性にぶつかってしまった。

「あいたっ！？」

打ち止めが尻餅をつく。インデックスは慌てて彼女に駆け寄り、  
引っ張り起こす。怪我はしていない様子だ。

「えっと、ごめんなさい。この娘の不注意で」

そのまますぐさま、ぶつかった女性に謝罪しようとして。

「あれ、あわき？」

「あら」

知り合いだったことに気付いた。

結標淡希。現在小萌の家に居候中の、高校生だ。

結標は打ち止めを見て、インデックスを見て、不思議そうに首を傾げる。

「……あなた、何をしているの？ 昨日は泊まりに来なかったし、てっきり上条くんについて行ったものだと思っていたのだけれど」

「う、うん。ちょっと色々と事情があつてね」

「事情、ね。というかこの娘……」

結標の視線が打ち止めに固定される。さてどう説明したものやらと戸惑っていたインデックスに、芳川を引っ張ってきた一方通行から声がかかる。

「おいチビシスター、何してやがる」

「あくせられーた。うん、ちょっと……」

インデックスが反応すると、結標がピクリと動いた。一方通行はふいに動きを止める。インデックスと打ち止めの頭越しに二人の視線が交差した。

「……あ、えっと」



その状態が十秒近く続いた後、インデックスが「お互いに自己紹介させた方がいいかな？」と思いはじめた時。

「……あなたのロリコン趣味はついにこの娘にまで及んでしまった、という訳ね、一方通行」

「シヨタコンの分際で変な言い掛かりつけてンじゃねエよ、結標」

突然お互いに悪態をついた。

二人の顔が不機嫌そうに歪む。これは明らかに、初対面同士の反応ではない。

「……えつと、二人はお友達なの？」

訊ねると、同時に否定の言葉が飛んだ。

「……なるほど、ね」

一方通行と一緒にいた理由を伝えると、結標は何とも言えない表情になり、やがて小馬鹿にしたような態度で一方通行に行った。

「……第一位で自称悪党の一方通行様ともあろうお方が、随分とお優しいことですねえ」

「……つるせエ、黙れ」

ぎすぎすした雰囲気。おろおろするインデックスは、思いついたように結標に訊ねた。

「あ、あわきっ。あわきは何をしに来たの？」

ナイス、と小声で打ち止めが称賛する。この空気を変えるには充分な台詞だった。

その問いに対し、結標は。

「……先生に、『セブンスミスト』で買ってこいって言われてね」

「？ 何を？」

「……その、初詣に着ていく、着物」

空気が、主に一方通行と結標の間の空気が若干凍りつく。一方通行は今にも笑いだしそうなほど身体を震わせている。

彼のことだ。「似合わねエ」って嘲るに違いない。

「Stayだよ、あくせられーた」

だからインデックスは、その前に彼の口を塞いだ。基本的には非力な少年であるため、もがくだけで振りほどくことが出来ないでいる。

その間に、羞恥で顔が真っ赤になっている結標に、打ち止めが話しかけた。

「み、ミサカも買いに行くんだよ、ってミサカはミサカはお姉さんに話しかけてみる！」

「……あら、そうなの」

「うん、オーダーメイドのやつをね、ってミサカはミサカはどんな仕上がりになったのか期待を膨らませつつ告げてみたり」

「へえ、いいわね。……私は、普通に売っているのを買っけれど」

「え、今からでも買えるの!?!」

そこで、一方通行の口を塞いだままの状態でインデックスが食いついた。

インデックスはてつきり、結標も打ち止めと同様に注文していたものを受け取りに行くものだと思っていたのだ。

着物が普通に売っているなんて、思いもしなかった。

「買えるわよ。当たり前でしょう」

「その発想はなかったんだよ……」

「普通にあるよね、ってミサカはミサカは呆れてみたり」

「じ、じゃあっ!」

インデックスが跳び上がる。

「わ、私も着物欲しいかもっ。私も初詣行きたかったけど、流石にこの服はどうかと思ってたし」

「まあ、神社にシスターさんが初詣に来るなんておかしいものね」

全員が納得する。インデックスは興奮して、眼前の一方通行に訊ねる。

「ね、ねっ、あくせられーた！ 着物つてだいたい何円なのかな？」

「ああ？ ……まア物にもよるだろオけど、『セブンスミスト』のやつなら一万か二万するんじゃないか？」

「！？」

途端、インデックスは愕然とした。上条が彼女に預けた金額は約五千元。倍近く足りない。

突然テンションががた落ちした彼女に、一方通行は珍しく慌てた様子で言った。

「お、おい。金がねエなら、俺が買ってやらないこともねエぞ？」

「……昨日ハンバーガーをあんなに奢ってもらったばかりだし、あなたにはかり負担させるのは申し訳なさすぎるんだよ……」

一方通行の提案をインデックスは断った。彼女以外の全員が、困り果てておろおろしはじめる。

……するとそこで、一方通行と結標の視線がある一点に固定された。

「……おい」

「……何？」

「よつするにオマエ、他人に買ってもらうのが申し訳ないんだよな  
ア？」

「うん」

「ならよオ、自分で金稼いで自分で買やアいいだけの話じゃねエか」

一方通行がぐいつ、とある店舗を親指で差し示す。立て掛けられた看板には、こう書いてあった。

『中華店“四星龍”<sup>スーシンロン</sup>特別企画。激盛りメニューを三十分以内に完食したお客様には、代金免除の上賞金十万円を差し上げます』

私も着物欲しいかも（後書き）

芳川、空気

## 片腹痛いかも

中華店“四星龍”は、三年前までは潰れかけの寂れた店だった。開店当初と比較して格段に客足が落ちていたし、第四学区にあらゆる中華料理を網羅した本格的な中華店が設立されたため、なけなしの客足すら徐々に徐々に離れていった。

そこで思いきって行ったのが、大盛り路線への変更だ。

端から見ても、店主からしてみても、ただのやけくそのような行動だ。失敗していれば、店主は全てを失っていただろう。

……そう、“いれば”。仮定の話だ。

結果的に、その路線への変更は大成だった。

質より量にこだわる者達が噂を聞き付けて矢継ぎ早に訪れ、なんだかんだ調子に乗ってはじめて賞金ありの特別企画も、数々の猛者共を撃沈させたことで学園都市中に響き渡り、多くのチャレンジヤーを招いた。

その悉くを撃沈させてきた“四星龍”は、更に多くのチャレンジヤーを招き、現在は大繁盛していた。

「はい、三十分経過。チャレンジ失敗です」

アルバイトの女の子が、タイマー片手に屈強な男にそう告げている。テーブルには大きめの皿の一面を覆う炒飯が置かれており、男はその前でうなだれている。どうやら企画にチャレンジして、失敗したようだ。

「くそっ、イケると思っていたんだがな……」

「結局、今まで挑戦してきた人達も同じことと言って撃沈した訳ですよ。とにかく代金は払ってもらいますからね」

「分かっている。くそっ……」

男がゆっくりと食べはじめる。が、すぐさま止まる。限界が来ているのだろう。

「……何か殺伐としてるね、ってミサカはミサカはシスターさんの背後に隠れてみたり」

打ち止めが呟く。途端、アルバイトの女の子がこちらに気付いたようで、とたとたと駆け寄ってきた。

「いらっしやいませ、五名様ですか？」

「はい」

「ではこちらの席へどうぞ」

広めのテーブルへ案内される。さきほど朝食をとったばかりの一方通行をはじめとする四人は、別に食べるつもりはないのだが。

「~~~~~」

この純白のシスターだけは、その限りではない。

アルバイトの女の子がおしほりを各々の前に置いて去っていく。呼ばれるまで待機するつもりだったのだろうが、その必要はない。

注文は、既に決まっている。



「お姉さん」

「はい？」

「企画、チャレンジするんだよ。メニューは炒飯でね」

途端、店内の雰囲気ががらりと変わった。アルバイトの女の子も、妙に鋭い目つきでこちらを見ている。

やがて。

「……ご注文承りました。店長、激盛り炒飯です！」

「あいよっ！」

店主の威勢のいい返事が店内に響いた。直後、残像が生まれんばかりの驚くべき速度で調理が開始される。

インデックス達が呆気にとられていると、アルバイトの女の子が、企画について説明をはじめた。

「この企画は、外の看板に記載されていた通り、制限時間内に激盛りメニューを完食することで代金免除及び賞金を獲得出来る企画です。制限時間をオーバーしてしまった場合、通常メニューの三倍ではきかない代金を支払っていただくことになりますが、よろしいですね？」

「うん」

承諾すると、「了解しました」と呟いて去っていく。鼻歌を刻まんなばかりの高いテンションで座るインデックスに、彼女の一つ前の

チャレンジャーが声をかけてくる。

「嬢ちゃん。そんな細身でよくこの企画にチャレンジしようと思っ  
たな。その素晴らしい精神には甚だ敬服する」

「なんかよく分かんないけど、どうもなんだよ」

「へへ。……だがこの大盛り、いや激盛りメニューを嘗めちゃい  
けねえ。なんせ胃の容量には自信があり、その上減量中のボクサー  
かつてくらい節食してきた俺ですらこの様だ。……言っちゃ悪いが、  
無謀な気がするな」

経験者からの忠告。一方通行をはじめとするノーマルな胃の持ち  
主からしてみれば、その忠告は驚愕するのに充分なものだった。

しかし、インデックスは顔色一つ変えない。

「ご忠告どうもなんだよ。でも、心配はいらないかも」

にっ、と笑う。

「私は、見た目ほどやわじゃないからね」

どん、と炒飯が置かれる。その凄まじさに、「うっ……」と一方  
通行が呻いた。

まず皿だ。さきほど遠目に見た時は「あ、何か普通より大きいな  
程度の認識だったが、間近で見ると本当にとんでもない。

打ち止めの顔より大きいのは、まあ許容範囲だろう。しかしイン  
デックスや一方通行、それどころかさきほどから妙に絡んでくる屈  
強な男の顔面より更に大きいというのは流石に許容出来ない。異常

なサイズだ。

そして肝心の炒飯の量だ。これに関しては皿以上に異常だ。

形容するならば、山。比喻対象も、山。ここまで見事に山の如く盛り上がった炒飯は、テレビでも滅多に見れない。

「し、シスターさんこれ大丈夫なの？ ってミサカはミサカは青ざめつつ訊ねてみたり」

打ち止めが心配そうに呟くが、レンゲを片手に携えて戦闘体勢に移行したインデックスの耳には既に聴こえていない。

「準備はよろしいですか？」

「うん」

「……それでは、企画チャレンジ、スタート!!」

アルバイトの女の子のコールと同時にタイマーのスイッチが押され、カウントが始まる。途端、インデックスは凄まじい速度で炒飯を胃の中へ流し込んでいく。

味分かんのか？ ちゃんと噛もうよ、と各々が呟く中、屈強な男が焦燥しきった様子で声を上げた。

「そのペースはダメだ嬢ちゃん！ 俺は今まで、嬢ちゃんと同様の方法で完食を試みた輩を何十人も見てきた。だがどいつもこいつもすぐに限界が訪れてお茶の間にお届け出来ない事態になっていた。嬢ちゃんも同じ轍を踏むことに って聴いちゃいねえ!？」

せっかく熱弁を奮っているにも拘わらず、無視してペースを一切落とさない彼女に愕然とする屈強な男。

騒がしい上に野太いその声を至近距離で聴いていた一方通行は、ドスの利いた声で告げる。

「いいから黙って見てやがれ筋肉ダルマ」

筋肉ダルマ！？ と心外そうな声上がる。無視して、一方通行はその光景を静観する。

「ね、ねえ一方通行。ほんとのほんとに大丈夫なの？ ってミサカはミサカはあなたに訊ねてみる。あれっでもうシスターさんの胃の許容量を遥かに越えてると思うんだけど、ってミサカはミサカはこの男性と似たような懸念を抱いてみたり」

「ん？ ……そおか、オマエは見たことねエンだな」

「え？」

「よおく見てる」

インデックスを指差す。まだペースが落ちない彼女を、屈強な男がおろおろとした様子で眺めている。以前のチャレンジャーの限界が訪れた時間帯が、この辺りなのかもしれない。

しかし心配そうなその表情は、徐々に驚愕に上塗りされていく。

「なん……だと！？ まだペースが落ちないどころか、徐々に上がってきている！？」

「そりゃあそおだろおよ。なんせコイツ、ハンバーガー三十個以上余裕で平らげるからな」

「う、嘘でしょ？ ってミサカはミサカは口あんぐりしてみたり……」

一方通行が何気なく告げた事実には、店内のほとんどの人物が唾然とした表情を浮かべた。一体この細身の少女のどこにそのようなキヤパシティがあるのだ、とでも言いたげに。

そこで、結標も呟いた。

「……それだけではないわよ」

「あん？」

「あれは一週間前、クリスマススイブの話よ」

結標は目をつむり、回想しつつ語りはじめる。

「その日、私の居候先の先生が受け持っているクラス全員が集まって、クリスマスパーティーを開くことになっていたの。私やその娘も何故か呼ばれたわ。……けれど、みんななんだかんだ事情があったのでしょね。結局クラスのメンバーは五人しか来なかったのよ」

「……それで？ ってミサカはミサカは先を促してみる」

「……大人数になるだろうと予測していたから、食料が余りに余ってしまったのよ。当然たった八人で消費できる量ではない。そう、思っていたのだけれど……」

そこで溜める。食事中のインデックスを除いた全員が「まさか、まさか」と呟く中、まるで怪談のオチを話すかのようなノリで、結標は言った。

「私達が食べきれなかった分、約十五人前を、全て一人で平らげてしまったのよ」

彼女の本質を知らなかった全員が驚きで声も出なくなっている。その間に、山のように盛られていた炒飯が半分も消失していた。

「……………」

そこでインデックスが動きを止める。限界が来たわけではない。余裕に満ちあふれたその眼差しは、真っ直ぐ店主を射抜いていた。

「……………完食する前に、一つだけ言っておくんだよ」

失礼にも店主を指差した彼女は、告げる。

「この程度で激盛りを名乗ろうだなんて、片腹痛いかも」

チャレンジ開始から約十五分。

制限時間をまだ半分近くも残しながらも、インデックスは激盛り炒飯を完食した。

「……………け、結局、本当に完食する奴を見るのははじめてな訳よ……………」

静寂した空気の中、戦慄したアルバイトの女の子が思わず素に戻って呟く。

「……な、なんてこった。あまりの迫力に思わずビブルチされちまった。あの漢のパンチ以来の衝撃だぜ……」

「す、すごい、ってミサカはミサカは驚きのあまり口数を少なくしてみたり」

「見ているだけでお腹が膨れるという感覚。……本当にあるのね」

その声を皮切りに、各々が口を開く。一方通行と結標だけは、「まあ当然だろう」みたいな表情をしていたが。

アルバイトの女の子が完食記念の写真を撮っていると、店主が、「マジかよ」とでも言いたげな表情でインデックスの前に立つ。その手には封筒が一つ握られている。賞金の十万円が入っているのだろう。

インデックスは席を立ち、彼の横に立つ。

「……さっきも言ったけど、片腹痛いね。私はまだ満足できていないかも」

とりあえずこれはもらっておくね、と小馬鹿にしたような態度で封筒を受け取る。屈辱感と敗北感に打ちひしがれ震える店主を脇をそのまま通りすぎる。

そうして店の出入口に差し掛かったところで、付け加えるように言った。

「……でも、味は今まで食べた何よりも美味しかったんだよ。その点に関しては、満足できたかも」

店主がバツ、と振り向く。インデックスは親指を立て、告げる。

「次に私が訪れる時は、量に関しても満足できるようにあなたが進化していることを、望むんだよ」

インデックスが店を後にする。残された全員がしばらく啞然とし、まず最初に打ち止めが叫んだ。

「……か、格好良すぎるよ！ ってミサカはミサカはシスターさんに抱き着こうと急いで店を出てみたり！」

その後ぞろぞろと一方通行一行が店を後にする。

残された屈強な男は、「敵わねえよ」と呟いて席につく。自分が注文した炒飯をまだ完食していないのだ。

「……店長」

アルバイトの女の子が呼びかける。店主はインデックスが出ていった出入口を見詰めながらその声を聴く。

「……結局、また努力すればいい訳ですよ。あのシスターさんが満足できるように」

こくりと、店主は頷いた。

年末のこの日、今まで誰も撃ち破れなかった“四星龍”の牙城《激盛りメニュー》を初めて崩した彼女の名は、店主の世代が交代した後にもずつとずつと語り継がれていったという。





片腹痛いかも（後書き）

これがいわる悪ノリ。

店主以外の店内にいた二人は原作のキャラクターですが、……誰だか分かりますよね？ 少なくともアルバイトの女の子は。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8071q/>

---

White x White

2011年10月9日22時03分発行